

Effects of a traditional Japanese medicine
Goshajinkigan, Tokishigyakukagoshuyushokyo
on the warm and cold sense threshold and
peripheral blood flow

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2013-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 里香 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001414

順天堂大学 博士(医学)

氏名 塚田 里香

論文題名 温冷覚閾値と血流量を指標とした牛車腎気丸と当帰四逆加呉茱萸湯生姜湯の評価

論文内容の要旨

本論文は、痛みやしびれ改善の報告のある漢方薬の客観的評価について、温冷覚閾値と末梢血流量を指標として検証された初めての研究論文である。

本実験では使用薬剤を、牛車腎気丸と当帰四逆加呉茱萸湯生姜湯とした。牛車腎気丸は、老化、腰痛、しびれ、末梢神経障害、むくみ、関節痛、冷え等に用いられており、近年では抗がん剤や糖尿病性神経障害の自覚症状に対する有効性が報告されている。また当帰四逆加呉茱萸湯生姜湯は、冷えに伴う、腰痛・腹痛・神経痛・頭痛等の諸症状、レイノー症状に効果のある漢方薬である。

この2つの薬剤それぞれについて、内服前後における温冷感覚閾値の変化と末梢血流量の変化を測定した。温冷感覚閾値は熱流束方式温冷覚閾値計を用い、末梢血流量はレーザースペックル血流画像化装置 (MoorFLPI) を用いた。今回、閾値測定の指標となった熱流束値とは温度差のある物質間に流れる単位面積あたりの熱量を示しており、体性感覚のうち、温覚閾値は主に細い無髄のC線維を、冷覚閾値は主に太い有髄A δ 線維を表しているとされている。

測定結果は、牛車腎気丸において、温覚、冷覚刺激共に熱流束・反応潜時が有意に低下・短縮した。当帰四逆加呉茱萸湯生姜湯においては、熱流束については温覚・冷覚刺激共に増加傾向であった。反応潜時は温覚に変化は認められず、冷覚は延長傾向であった。末梢血流量については牛車腎気丸、当帰四逆加呉茱萸湯生姜湯共に有意に増加した。

今回の実験により、温冷覚閾値と末梢血流量に、牛車腎気丸と当帰四逆加呉茱萸湯生姜湯が作用することが確認された。また、両薬剤が、臨床的に痛み・しびれという類似の効果を示すにも関わらず、温冷覚閾値を指標とすることで作用点が異なることが確認された。